



さゆりっ子

No.3

文責 若林一成

受け止める 大切さ



朝の自由時間から子どもたちはお庭で水遊びに歓声をあげている。水たまりに入って、シャベルでまわりを掘り、広げようとしている子たちの姿もある。泥の中に裸足で入り、ぐにゅぐにゅ感をしっかりと感じている。工作で糊を触った時のべちょべちょ感といい、その時にしか感じ取れない感覚であろう。今だからできる貴重な経験になることだろう。

午睡後、Kさんは泣いて寂しさやトイレに行きたくないことなどを訴えることが多くなってきた。今までなかった姿に初めは戸惑ったが、毎日やりとりをしながら関わっていくうちに様々なことを”嫌”と言うだけでなく、自分の本当の気持ちを伝えられるようになってきたことから、自然とこちらも信頼関係ができてきたのかなと嬉しく思えるようになった。気持ちを受け止め援助しながら、頑張るところと保育者に頼るところのバランスをうまくコントロールしていけるようにしたいと思った。

自分の力でできること、「やってみよう」の気持ちが強く芽生えてきた分、できなかった時の悲しい・イライラの気持ちもきつと強いのではないかと思った。やろうとしていることができなくて悲しい気持ちになってしまった場合は、「ここまでは自分でできたんだね。」と途中まで自力でできたことを認めてあげることもとても大事なことだと思うし、ほめてもらったことが自信ややる気につながっていくと思う。

どちらも未満児クラスの様子を伝える保育記録です。

子どもたちは日々いろいろな体験を蓄積する中で、おもしろい・うれしい・誇らしいといったプラスの感情、また、こわい・悲しい・恥ずかしい・くやしい・腹が立つといったマイナスの感情を経験していきます。そのとき大人の大切な役割は、子どもが様々な感情と直面しているときに、その感情をいかに温かくかつしっかりと向き合い、共感的に受け止めてあげるか、またとりわけ子どもの感情が不安的なときは、いかにうまく安心感を与えてあげるかです。心理学ではよく、感情は人が自分自身にとって大切なことを学ぶ際の「アンプ」の働き（経験したことの意味の重要性を増幅して心や脳に根づかせる働き）をするといわれています。だからこそ子どもの近くにいる大人は、その子どもの感情を通した学びの支え手として重要なのだと考えます。

2つの保育記録は、どんどんと芽生えてくる2歳児の感情の世界に対し、柔軟にかつ的確に対応を考えていこうとする保育士の姿勢がうかがえます。

子どもの気持ちに寄り添い、慰め、励まし、ともに喜び、時に同じ目線で一緒に

考え、また時に大人としての知恵をそっと示してあげるといった何気ない行為の積み重ねの中で、子どもたちの大人になるまでに必要な感情の多くは確かに立ち上がり、豊かに育まれていくと思っています。

大好きな大人に囲まれて

一般財団法人
全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

理事長 安家周一

桜の季節が足早に過ぎ去り、若菜の季節となりました。私たち保育・教育施設に従事する者にとつて、盆と正月が一緒に来たようなあわただしく煩雑な季節です。その中で、卒園児を丁寧に送り出し、新入園の方々が安心していただけるよう心を砕きます。

幼稚園や認定こども園は学級担任制をとっています。小学校高学年くらいになると教科担任制も導入されていますが、低学年は学級担任制がほとんどです。年齢の小さい子どもたちは、好きな人からしか学べません。よって、担任と、「好き」という信頼関係がなければ学ぶことは難しいといわれています。先生は一生懸命子どもとの関係を確立しようと骨を折ります。また、保護者との関係もとても大切です。保護者と保育者の安定的な信頼関係は、子どもにも伝播し、安心して園に通う大切な条件となります。

新入園の方々にとってはこれから始まる長いお付き合いです。また、0歳から6歳までの時期の人的・物的環境が、その子の脳や心の発達に大きな影響を及ぼすとされる「感受性期」(表情

や言葉、感情を獲得する時期)にもあたり、手塩にかけて関わりたいと思います。

丁寧にゆっくりと子どもに関わり、できることを認めることは自分のことを見てくれているとの安心感につながりますし、間違ったことをしたとしても叱るのではなく、促したり違った方法を選ばせたりする関わりがとても大切です。あつという間の数年間、「一緒に子育てライフ」を楽しみましょう。



子どもの魅力 (5 / 31)

「中庭で遊んでもいいですよ。」と放送が入り、久しぶりに子どもたちと探検気分で行ってみた。園庭とちがって自然いっぱいの中では子どもたちのかかわりもおもしろい。カラスノエンドウには豆がいっぱいあると見せてくれたり、杏の実を取ってくれと呼びに来たりとうれしそう。そんな中、図鑑を片手に静かに花を覗き込んでいる年少さんの男の子と出会った。その子は紫色の小さな花をつまんで「ホトケノザ」と教えてくれ、つぼみを口に含んで蜜を味わおうともしていた。きっと日頃から植物に接する体験があるのだろうな。とっていると「図鑑には載っていないかも。」と更に話しかけてきた。私は一瞬「エッ!」となり、一緒に図鑑をめくっていった。すると確かに図鑑には「ホトケノザ」はありません。いくらわかりやすい写真といってもそれだけで植物を区別するのはなかなか大変である。文字もどのくらいわかるのかな?植物への興味・関心をもっと探してみたいと思わされた。3歳児も決して侮れない。

